

「転移性骨腫瘍のチーム医療 - 動けるリハビリテーション治療を目指して -」

弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座

大鹿 周佐

近年、がん薬物療法、放射線治療および支持療法の進歩により、がん患者の生命予後は大きく改善し、「がんと共に生きる時代」を迎えた。一方、骨転移患者は年々増加しており、疼痛、病的骨折、脊髄圧迫などの骨関連事象（Skeletal-related events：SRE）はADLやQOLを著しく低下させるだけでなく、がん治療の継続や生命予後にも影響する。そのため現在の骨転移診療では、「最後まで動ける生活」を支えることが重要な治療目標となっている。

日本整形外科学会では2018年に「がん口コモ」を提唱し、その診療体系としてOnco-Orthopaedicsという概念が発展してきた。整形外科医は骨転移のみならず、薬物療法による骨脆弱性や末梢神経障害など、がん患者の運動器障害全般に関与し、多職種と連携しながら運動機能の維持を目指している。リハビリテーションもその重要な一翼を担い、患者の活動性や生活機能を支える役割を果たしている。

転移性骨腫瘍診療では、病的骨折や脊髄麻痺が完成してから対応するのではなく、切迫骨折や脊椎不安定性の段階で適切に介入することが重要である。予後予測や骨折リスク評価に基づき、手術、放射線治療、薬物療法、骨修飾薬を組み合わせた集学的治療と、早期からのリハビリテーションを行うことで、運動機能の維持と治療継続が期待できる。安全なリハビリテーションのためには、病変の状態や骨折リスクを多職種で共有し、適切な活動レベルを判断することが不可欠である。また、リハビリテーションの現場は身体機能や疼痛の変化をいち早く捉える場でもあり、早期診断・早期治療につながる重要な役割も担っている。

本講演では、がん医療の進歩に伴う転移性骨腫瘍診療の変化を概説するとともに、整形外科的治療、放射線治療、薬物療法、リハビリテーションを融合したチーム医療の実際について紹介する。また、「動けるリハビリテーション」を実現するために、多職種がそれぞれの専門性を生かして連携することの重要性について考えたい。